
日番谷隊長の女難 1

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷隊長の女難1

【Zマーク】

Z4009D

【作者名】

切香

【あらすじ】

日番谷隊長が女にモテモテ・・・ではないような、ただ単に迷惑かけられてるだけなような、微妙な小説。まあちやんと、妙齢の美女（？）乱菊と、赤ん坊がでてきます。ほのぼの、ちよひつじギャグ。

第一話：十番隊の任務

昨夜のうちに薄化粧した山々は、水墨画のよつに黒と白の世界と化している。

見る間に朝日が差し込み、雪がきらきらと一斉に輝いた。山のあちこちから、水蒸気がたなびいているのが見える。

「たーいちょ。お茶、入りましたよ」

障子を半開きにして、外の雪景色を眺めていた俺の目の前に、湯気の立つ湯呑みが差し出された。

頷いてそれを受け取ると、松本は障子の向こうに目をやり、歎声をあげた。

「絶景ですね～、流魂街の景色も、なかなか捨てたもんじゃないですね。

なんか旅館に遊びに来たみたい」

「仕事だぞ、これは」

「知つてましたか、隊長？現世だとこいつの時、殺人事件が起るんですよ。

サスペンス劇場！　温泉殺人事件！とかいう

「・・・知るか」

「だいじょうぶ、隊長が今晚温泉に浮かんで土佐衛門になつてても、あたしが名推理で犯人を捕まえてみせますから」

「ここは現世でも温泉旅館でも、サスペンス劇場でもねーよ

俺は松本との不毛な会話を切り上げるため、松本を押しのけると障子を開け放ち、縁側へと出た。

鎧戸が開け放しになり、外とつながった縁側は裸足にひやりと冷たが、心地いい。

縁側から見下ろすと同時に、崖下からの冷たい風が吹き上げ、俺の

前髪を揺らした。

「」は、崖の上に立てられた、寺院のような形状をしている。この寺院までには、崖に掘り込まれた石階段を延々と上らなければならぬ。

頂上のここからは、階段はまるで玩具のように小さく見えた。遙か下には、延々と見える限り続く塀が張り巡らされている。それはまるで地平線のように、近くで見ると真っ直ぐだが、遠くから見るとかすかに円を描いているように見えた。

この門の内側が広大な「流魂街」、外側が現世とつながりを持つソウル・ソサエティの外部だ。

そしてこの建物の50メートルくらい下に、関所が設けられていた。巨大な門の外に、黒々と人々が群がり、列を作っているのがわかる。関所の内側はそれとは裏腹に整然としたもので、隊舎に似た平屋作りの建物が並んでいる。

ちらほらと、関所の人間だろうが、人影が見えた。

松本も縁側についてこようとしたが、廊下に足が触れただけで、「おお寒！」と部屋に体を引っ込んだ。

「よく裸足でそんなトコ歩けますねー。子供は風の子ですもんね」「うるせえ！俺は寒い方が得意なんだ」

俺がそう言つて部屋の中の松本を振り返つたとき、締め切つた廊下へ続く引き戸の向こうで、声が聞こえた。

「失礼します、日番谷十番隊隊長、松本副隊長は中におられますでしょうか？」

「入ってくれ」

俺が告げると、戸がスッとひき開けられる。

廊下で膝をついて座っていたのは、好々爺つて表現が似合つような、白っぽい着物に山吹色の羽織を羽織つた爺さんだった。

「本日は、」JのよつなとこりまでJ足労を頂き、ありがとうJぞJこました。

この西関門を預かつております時元と申します」

そう言って、丁寧にも廊下に三つ指をつき、頭を下げた。

「いえいえ。JのJの所精靈廷に押し込められる一方だつたんでも、ありがた・・・」

「松本！・・・時元殿、概要は聞いてるが、何が起きてるか説明してくれ」

「は」

時元、と名乗つた男は、一瞬意外そうな顔をしてから、部屋の中に入ってきた。

隊長の俺が敬称で呼んだから違和感があつたんだろう。

年寄りを呼び捨てにするのに抵抗があるのは、やつぱり婆さんに育てられたからだろうか。

時元は俺と並ぶと、下に広がる景観を見下ろした。

「J番谷隊長もご存知かと思いますが、Jのソウル・ソサエティに4箇所ある関門の一つ、西関門です。

現世からの死者は必ず、4箇所のうちどれかの門をくぐり、それぞれ流魂街の各地域に順番に割り振られてゆきます」

「すつJの、列ねえ・・・」

いつの間にか隣に来ていた松本が、振り分けを待つて死者の列を見下ろした。

「そうですね。死者の数にもよりますが・・・大体平均で一ヶ月くらいは並びます」

「いつ・・・一ヶ月？」

松本が素つ頓狂な声をあげる。

「あたし、よくこんなところ並んだわア・・・ていうか隊長、西流

魂街でしたよね？」

「田番谷隊長、西流魂街の出身なのですか？それなら、この門を通られますな」

時元が、意外そうな声をあげて俺の顔を見た。

確かに、死神といえば精霊廷出身の貴族、ていうのが普通だからな。流魂街出身なんて少數派だ。

「ああ・・・でも、全然覚えてねえな」

「隊長、意外と頭悪いですか？」

「答えようがねえ質問すんな！お前こそ、覚えてんのかよ？」

「あたし、馬鹿ですから」

「お前も覚えてねえんじゃねえか」

「まあ、現世で死んでから閑門をくぐり、流魂街に居つく頃までの期間は、あいまいになる場合が多いですよ。

おかしなことじやありません」

俺たちのやり取りをとりなすように、やんわりと時元が割つて入った。

「話がそれるからしゃべんな、松本。それで、2日前、何者かに襲撃されたと聞いたが」
は、と時元は頷いた。

「死者の列が攻撃されたのと、流魂街の外堀の一部分も破壊されました。

その時は、精霊廷の門番、児丹坊殿の尽力で追い返せましたが、またいつ襲来するか読めない状態です」

「児丹坊は、ここに警備もやつてるのか？・・・知らなかつたな」「はい。精霊廷との関門は何万キロと離れておりますが、今お2人に使つていただいたのと同じよつて、穿界門を使って行きました」

「なるほど。敵の外見は？」

「体長は約10メートル。人間のように一本足で立ちますが、全身

は長く茶色い毛で覆われています。

顔には・・・まるで仮面のようなものをつけ、衝撃波のよつなものを口から吐きます

「・・・それ、虚じやないですか、どう考へても。通常はありますいですが・・・」

「死神の魂葬ミスなら一体程度、ありえなくはねえよ。
とりあえず、襲撃された場所を直接見たい。あと、兜丹坊も呼んでくれ」

俺はそう言つと、玄関に戻り、草履を取つて戻つてきた。

「隊長? なんで縁側で草履はくんですか?」

「気にはすんな」

「すんごい、横着しよつとしてません?」

「松本。お前は時元殿と後できてくれ。先に行つてる
「ちよつと!」

話聞いてんですか! という松本の声は、風の音にかき消される。
俺が、縁側から一気に崖下に飛び降りたからだ。

死霸装が風にあおられ、バタバタと音を立てた。

視界に大きく関所の様子が迫つてくる。

下にいる奴らも、まさか上から俺みたいなのが降つてくるとは思つてないらしく、全く気付いていない。

靈圧がある敵向けの戦闘教育は、受けてない、か・・・

死神だつたら、俺の靈圧にすぐに気付くはず。

まあ、ソウル・ソサエティに虚が入り込むことなんて極めて稀だから、必要ないんだろうが。

「見覚えねえなー・・・

俺は無意識のうちに呟いていた。

その時。俺を見つめる目線を感じ、俺は視線を関門の外にやる。

そして、難なく視線の主を見つけた。

第一話： 関門の襲撃者

「児丹坊！お前、来てたのか」

そこに居たのは、10メートル近い巨体の男。精靈廷西門の守護職、児丹坊だ。

こいつの頭と、俺の全身が同じくらいのサイズ、といつてたらメな体の持ち主。

「冬獅郎！」

俺は、奴が満面の笑みを浮かべて差し出した両手のひらの上に一旦飛び降り、すぐに肩に飛び移った。

「お前、2日前に、ここで虚と戦つたって聞いたぞ」

「ああ。誰か死神が呼ばれるって聞いたんだけど、まだ来ねえだろ。鼻持ちならぬー奴と顔会わせんのはいやだけどな、来るまでは俺が見張つといつと思つてな」

あー。

俺があいまいな返事をすると、児丹坊はしばらく沈黙した。

「待て。死神つて、おめえか？」

「遅えよ、気づけ」

「いやいや、おめえのこと言つたんでねえぞ？おめーは俺の親友だ。俺はてつきり、貴族出身とかのお高くとまつた連中が来るんでねえかと・・・」

「いいつて」

俺は手を振つて、焦る児丹坊をさえぎつた。

死神の評判が、必ずしも高くないことは良く知つてる。

実際、「鼻持ちならない」「お高くとまつた」「貴族出身の」死神、と聞けば、すぐ顔が思い浮かぶくらいだ。

「そんなことよりお前、どこで虚と戦つたんだ？」

「ホラ、そこだ」

児丹坊が指差したほうを見下ろすと、100メートルほど遠くで、なるほど、崩れ落ちた外堀を修理している集団が見えた。トン、と児丹坊の肩から降り、そちらへ向かつ。ズダン、と派手な音を立てて児丹坊が後ろに続く。俺たちが行くと、修理していた奴らは慌てて周りへ避け、膝を地面についた。

近くで見ると、外堀は恐ろしくでかかった。

児丹坊のさらに倍は背丈があるだろう。

その一角が、見事なまでに打ち壊され、流魂街の中が見えていた。

広がるのは荒涼とした原野だった。

無理もねえ。流魂街の一一番外側は、誰も生きて行けねえような環境だつて聞いてた。

俺は崩れ落ちた門に手を当てる。そして、そこに残された靈圧を感じ取った。

大虚か。

確かに弱くはないが、隊長や副官クラスの死神が出張る必要はねえ。

松本を残らせるか。

そう思つて、壁から手を離した時だった。

わああっ、と関門の方でざわめく声が起こつた。

ついで、誰かが怒鳴るよつた声、それに言い返すよつた甲高い声も。

「どうした？」

俺は児丹坊の肩に乗り、声がするほうを見やつた。

「関門のトコだな。死者が何か揉め事起こしてゐみたいだ。止めるか？」

「俺の仕事じやねえけどな・・・」

「とか言って、結局首突つ込むんだろう」

そういうながら、一番先に首を突つ込むのはこいつなんだ。

言い返そうと思ったときには、もう児丹坊は俺を乗せたまま、そちらに駆け出していた。

「官憲の横暴だ！」

「そうだ、撤回しろ！」

「つるさい！これは決まり」となんだ」

俺たちが駆けつけた時には、既に騒ぎは大きくなっていた。しかし、ドシーン、といつありえない足音にて、皆が言い争いをやめてこちらを見る。

正確には、児丹坊と、俺を。

「わ・・・でつかいのと、ちっさいのが・・・

心の声は聞こえねえが、絶対そう思つてゐる。

俺は児丹坊の肩を無言で蹴り、死者達に言い返していた守衛のそばに飛び降りた。

「何事だ！！」

「ひい！いえ・・・」

「冬獅郎、なに切れてんだ？」

「・・・切れでねえ。で？何があつたんだ」

「そ、それが

黒い手甲脚半に身を固めた守衛の男は、困り果てたように呟つて、視線を下に落とした。

その時、何かが俺の袴の裾を引っ張った。

「・・・ん？」

俺が見下ろしたその場所にいたのは。

「んふー」

俺を見上げて笑う、赤ん坊だった。

「田、あつちまつた・・・！」

自慢じやねえが、赤ん坊なんて触つたこともねえ。

赤ん坊の相手するくらいなら、大嘘の群れと戦つたほうがマシだ。

俺は、一步引いた。

赤ん坊は、一步分這つて進む。

困った・・・！

そう思つたとき、

「隊長！」

その声を、ありがたいと思つたのは初めてかもしれない。

時元を引き連れて歩いてきた松本は、目の前の俺と赤ん坊を見比べて、鳩が豆鉄砲食らつたような顔をした。

「隊長の、子ですか・・・？」

「そんなわけあるか！」

「ですよね。隊長も子ですもんね」

松本は非礼な台詞を振りまきながら俺の前まで歩いてくると、ひょい、と赤ん坊を抱き上げた。

「かわいい女の子ね～！ いないない、バア～！」

母性など砂粒ほども持つてないと思ってたが、意外と子供好きのようだ。

俺には、どこをどうみたら女だと分かるのかさえ、サッパリだ。
俺は何とか気持ちを立て直し、守衛に向き直つた。

「何事じや、これは？」

時元が守衛の男に向かつて問いただすと、守衛の男は、困つたように後頭部を搔いた。

「いや、その赤ん坊は死者の一人なんですが・・・更木に振り分けが決まつたんです」

「更木！」

松本が大声を出した。違う、その更木じやねえ。

「更木つてのはエリアの名前だ。エリア番号は百。最も治安の悪い場所だ」

「こんな赤ん坊、生きていいけるわけないじゃないですか！」

そう言つて松本は俺と、守衛を見比べた。俺を見られても困る。

「はあ。ですが、死者を公平に、順番に振り分けるのは関所の不可侵のルールなのです。

治安の悪い地域に振り分けられる死者もいる以上、条件をつけていては切りがありません」

「それが横暴だつて言つてんだ！」

死者の列から怒号が飛ぶ。

なるほど。

この赤ん坊が「更木」に振り分けられるのを見た死者たちが、もつと治安のいい場所へやるように守衛側に要請した、ということか。その感覚は確かにまともだが、その一方で守衛の理屈も分かる。ガキだから治安のいいエリアで、大人は悪くてもいい、と単純に割り切ることもできねえし。

でも・・・

「・・・冬獅郎よ」

頭上から児丹坊の声が降つて来る。やつには珍しく、困ったような声音だ。

俺は騒ぎの渦中にいるとは露知らず、にっこり笑つている赤ん坊を見た。

松本の腕の中にいたそいつは、俺の視線に気付くと、顔いっぱいで笑つて、手を差し伸べてきた。

「この子、隊長のこと好きみたいですね・・・」

俺はそいつに歩み寄る。勝手に、深いため息が出た。

そのまま手を伸ばして、赤ん坊を抱き取つた俺を見て、松本は目をしばたかせた。

「こいつは、連れて行く。何とかしよう」

死者たちの中から、一斉に歓声があがつた。

全く。自分の行き先を心配するので精一杯だつた。

さつきちらりと見た、原野にしか見えないエリアを思い出してた。
あんなトコに、こんな赤ん坊一人放り出せねえしな。

「ひ、日番谷隊長・・・」

当惑して俺を見る時元の視線を感じて、俺は振り返った。

「すまん。でも、ちょっとと思うところがあるんだ。俺に任せてくれ
「連れて行け、冬獅郎。ここは俺と乱菊さんでどうにかすらあ
「松本。相手は大虚だ。破面じやねえから、それほど気張ることね
え。頼んでいいか」

「・・・了解ッス」

多分頭の中は疑問符でいっぱいなんだろうが。それでも松本は頷いた。

児丹坊がやつてきた穿界門を通り、そこは精靈廷西門の真ん前だつた。

確かにこれなら、距離は離れてるにしても、精靈廷と西関門の両方を護れるだろ？

それに、騒動が起ることなんて、それぞれ何十年に一度あるかどうか、くらいだ。

振り返ると、背負つた赤ん坊は俺の背中でスヤスヤと寝息を立てた。

人の気もしらねーで・・・

どこかで、お前の親は、お前を失つて、泣いてるんだろうに。

最近の現世では、親が子を殺すこともあるって噂で聞いたけど。お前みたいに笑える奴は、きっと違うんだろ？

そう思つては見たが、こんな幼さで命を絶たれたこのガキは、問答無用に哀れだつた。

あまり隊首羽織姿でうろつくのも嫌だつたから、瞬歩を使った。見慣れた家の前で、俺はほつと息をつく。

粗末なその家は、俺が死神になる前、ばあちゃん、雑森の3人で暮らしていた場所だ。

この俺を育てくれたような人だから、このガキ1人くらい、何とかしてくれるだろ？

「ばあちゃん、いるか？」

ガラリ、と扉を開けた瞬間。俺はその場に固まつた。灯りも差さない部屋の中で、布団に包まって、ばあちゃんは動かなかつた。

囲炉裏にも全く火の気がない。

「ばあちゃん、大丈夫か？」

俺は慌てて膝立ちで布団の脇まで寄ると、ばあちゃんを覗き込んだ。

「ああ・・・冬獅郎。戻つたのかい」

その声も、体もガタガタと震えてた。その額に触ると、明らかに平熱じやない。

「なんだか、寒くてねえ・・・」

「当たり前だ！この寒いのに火も入れねえで」

俺は囲炉裏を振り向くと、口元で「赤火砲」と小さく唱えた。

それと同時にぼつ、と囲炉裏に火が灯る。

本当はこんな日常生活で使えるはずも無い技だが、力を最小限にまでコントロールできれば、正直かなり便利だ。

公には禁止されていたが、俺はよく使っていた。

土間に積み上げてあつた薪を囲炉裏に突っ込み、締め切られていた窓を開けて外の光を入れた。

そして氷輪丸で氷を出すと、それを刀で細かく碎いて、氷枕を作る。それをばあちゃんの額に置き、震えがおさまった所で、やつと俺は一息ついた。

その時。

「ふわあ」

乳臭い息が首筋に当たり、俺は思わず肩をビクッと震わせた。完全に存在を忘れてた。

「その子・・・」

ばあちゃんの目が、赤ん坊に吸い寄せられる。

「拾つたんだ。西関門で」

背負ってきた紐を外し、あまりの体の柔らかさに若干ビリツツ、畳の上に下ろす。

俺の気持ちなんて露知らず、赤ん坊は上機嫌で部屋を見回すと、早速這い回りだした。

「関門・・・？」

「ああ。治安の悪い地域に送られようとしてたんだ。連れてきた」

「・・・そりゃい」

「自分がやつてもらつたことは、ちゃんと返してやらなきゃな
ばあちゃんは布団の中から目を細めて赤ん坊を見てたが、俺がそつ
いつと、俺の顔を見上げた。

「ほんに、お前は良い子だねえ」

「・・・そんなんじゃねーよ」

柄にもねえが、思わず赤面した。

良い子、なんて護廷十三隊の隊長に言つ奴がほかにいるかよ。

「何か食わなきや治らねえぞ。米あるか？」

空っぽの鍋を台所から持つてきて、畳の上で鍋の上に氷輪丸をかざ
す。

こんな格好、とてもじやねえが部下には見せられねえ。
少し靈圧をこめるだけで、鍋は氷で満たされた。

「便利な剣だねえ、冬獅郎・・・」

「本来こんな使い方しねえけどな」

それを囲炉裏の火にかけようとした、その時。

赤ん坊が、氷に手を伸ばそうとしてるのに俺は気付いた。

「冷たいぞ、離れてろ」

俺が引き離す前に、ペトリ、と指を氷につける。

その途端、ばしゃんと音がして、氷が瞬時に水に変わった。

「と・・・溶けた？」

俺は相当間抜けな顔をしていたに違いない。

赤ん坊が、俺の顔を見て腹が立つくらい笑つたから。

「オイ笑うな。お前、靈圧があるのか？」

そんなこと言つても、相手はしゃべれもしねえガキだ。
でも、鍋に手を突っ込んで、水を飲む姿に確信を持つ。

普通の死人は、何も口にする必要がねえ。飲み食いするのは、靈圧

がある奴だけだ。

「氷を、水にする能力、か・・・」

鍋で粥を作り、ばあちゃんと赤ん坊に食べさせてから、俺は首をひねつた。

赤ん坊は俺の膝に凭れ掛かつて寝てる。

「冬とか生活に便利でいいねえ」

布団の上に半身を起こしたばあちゃんがウンウンと頷く。俺は答えなかつた。

初めこそびっくりしたが、考えてみると、この力何か役に立つのか?俺と似てるが、靈圧は氷雪系とは明らかに違うようだ。あえていえば「水」系か。

精霊廷にも、こんなおかしな能力を持つた奴はいなかつたような気がする。

俺が考え込んでると、ばあちゃんは赤ん坊の顔を覗き込んで、言った。

「名前、つけてあげなきゃねえ。しゃべれないんじや、名前も分からぬいだろうし」

「名前な・・・」

俺も赤ん坊の顔を覗き込んだ。

ヒトに名前をつけたことなんて一度もねえから、気がきいたことを返せるはずもない。

「遷、はどうだい」

「みお?」

「水脈、ていう意味もあるし、お前が連れてきたんだ。どっちにも縁がある、この名前がいいよ」

水はとにかく、俺に縁がある名前か。俺は改めて、赤ん坊の顔を見下ろす。

氷雪系の力を持つ俺の子供分か?年は子供ほど離れてねえから妹分

か。

その名前を、ずっと、死ぬまで呼ばれ続けるのかと思うと、それは
とてもなく重い気がした。

「・・・まあ、今すぐつけなくてもいいわ」

「いい名前だと思うけどねえ」

「なあ、ばあちゃん」

「なんだい」

「俺の名前って、本名か？俺は自分で、そう名乗ったのか？」

「・・・どうしたんだい、急に」

「覚えてねえんだ。あの閑所でばあちゃんと言つたはずなのに。
それだけじゃなくて、その時の記憶が全然ねえんだ。この名前が本
名なのかどうかも」

「不安になつたのかい。それで」

俺は言葉に詰まつた。

不安、と言われるとちょっと違つかもしれないが。
でもほかに当てはまる言葉も無い感情だった。
ばあちゃんはふう、と息をついた。

「安心しなさい。お前は、自分で名乗つたんだよ。

ひつがやとうしる。漢字は自分で書けなくてね、ばあちゃんと桃
であれこれ書いてみて、

あんたが頷いた字にしたから、間違えてないはずだよ

「・・・そつか」

この家に落ち着くまでの記憶を、俺はほとんど持つてない。
現世でどうこう暮らしをしてたのか、なぜ死んだのか。
そして、どうやってこの家に来たのか。

物心ついたときにはもうこっちにいたから、人並みの記憶なんて持
ちようがないのかもしれない。
むしろこっちで生まれたって言ったほうが自然に思えるくらいだ。

でも・・・現世に、確かにどこかにいたんだろう親に、少しでも繋

がりがあるのは、悪い気はしなかつた。

赤ん坊は無心に火を見つめている。

ばあちゃんも布団に戻つてうつらうつらしている。

朱色の火の光を見ながら、俺も眠氣を感じ始めたとき・・・伝令神機が鳴つた。

接受画面に出てこるのは、松本の名前。

「俺だ」

「隊長つ！」

「何事だ？」

その声だけで、何かが起こったのは明白だった。

「大虚が、予想以上に力をあげていて・・・」のままじや、関所にも被害が出ます！

「わかった、今すぐ行く！」

松本は、戦闘業務ではそつそつ助けを求めてこない。

事情は分からねえが、一刻も早く行つたほうがいいのは確かだつた。立ち上がって、ふと赤ん坊を見下ろした。

このまま、弱つてゐばあちゃんに世話を任せしていくわけにもいかねえ。

俺は少しためらつたが、赤ん坊を抱き上げ、紐を引っつかんだ。

「ばあちゃん、ちょっと出てくる」

「・・・冬獅郎」

「ん？」

戸を開けたときに呼ばれて振り返る。

「ごめんな」

「・・・何言つてんだ、いまさら。すぐ戻る！」

音を立てないように戸を閉め、俺はダン、と地を蹴つた。

第四話：その小さな手を

「おいつ、松本と児丹坊はどこだ？」

俺は駆けつけざま、関所の入り口にいた時元の背中に声をかけた。
「おお、日番谷隊長。お待ちしておりました。お2人はあちらです！」

関内で焚かれた松明の光を浴びてなお、時元の顔は青ざめていた。
「何があつたんだ？」

「あの化物、見る間に死者の魂を奪い取り、力を高めたのです。
そこからとてつもなく強く……」

「分かつた。ここを出るな！」

もう尋ねるまでもなかつた。派手な靈圧が夜気を伝わつてくる。
俺は時元にそつうい捨てると、

「え・・・あ。日番谷隊長！」

俺の背中に手を伸ばして何か言おうとした時元を振り切り、瞬歩で
ぐん、と速度を上げた。

しかし、やたら遠くで戦つてるのはどうじつことだ?
瞬歩は確かに速いが、そもそも長距離走には向いてない。

闇の中でもはつきり輪郭が分かる、児丹坊の右肩に飛び乗つた時は、かなり息があがつていた。

「お・・・おい、児丹坊、無事か? 松本も
「と・・・冬獅郎!」

「隊長!」

闇の中から声が返る。

それと同時に、闇の中に、ギラリと光るもののが現れた。

それは大きさを一気に増し、辺りを真昼のように照らし出す。

児丹坊より数メートル先に、松本の姿が見えた・・・と思つた途端、
虚閃が松本がいたところを直撃した。

「松本！」

「大丈夫です」

児丹坊の左肩から、松本の声が聞こえた。

あつという間に視界は闇に消える。

一瞬照らし出されたその虚の15メートルはあるでかさに、俺は息を飲んだ。

そいつの靈圧がビリビリと肌に伝わってくる。

明らかに、脳間感じとった靈圧よりもあがつてゐる。

グルルル・・・

獸のような声が闇から響き、児丹坊は慌てて虚に向き直つた。

「申し訳ありません。虚に、死者の魂を取り込ませてしましました」

「・・・バカヤロー」

「すまねえ。俺、なんも知らねえで虚をぶん投げたら、死者の群れに突っ込ませちまつて・・・」

それだ。

俺はそう思つたが、こいつに文句を言つるのは後だ。

「乱暴だが、ぶつた斬れば死者の魂は結局ソウル・ソサエティに行ける。俺がやる！」

そして、刀を鞘から抜こうと右手を肩にやつて・・・俺の手は宙を切つた。

「・・・へ」

振り返ると、ガキが俺の右手を握つて、にこー、と笑つた。

氷輪丸がねえ！

そういえば、鍋に水入れに井戸まで行くのが面倒臭くて、氷輪丸で代用したのを思い出した。

しかもガキを時元にでも預ければいいと思って、それも完全に忘れてた。

「た・・・隊長。サイテーです」

なんでこんな松本なんかに言われなきやなんねーんだ。
でも、否定できねえ。

「も・・・問題ねえ」

「問題しかないでしょ！」

「いや待て。氷輪丸が無くても力は使える。ただ・・・問題がある
「やっぱりあるんでねえか」

「力の制御ができるねえ。松本、あいつをできるだけ遠くに吹っ飛ば
してくれ」

「もう・・・しじうがないわね！」

松本の斬魂刀の刀身が、さらりと砂のように闇に溶ける。

「唸れ・・・灰猫！」

砂状になつた刀身が、一気に破面を襲つた。

「ギヤアアア！」

破面が獣の叫びを上げて、大きく後ろに飛びのいた。
俺は間髪要れず、鬼道を唱える。

「破道の三十、氷雨！」

本来は、せいぜい腕くらいの太さの氷の柱を生み出し、敵にぶつけ
る技だ。

しかし、コントロールを失つた俺の場合、ざつと半径数メートルに
もなる。

そのうちの一一本が、破面を貫いた・・・といつより、頭から潰した。

「やつた！」

児丹坊が声をあげる。地上に下りていた松本も、笑顔を浮かべよう
として・・・固まつた。

「ちよつと！あぶない、あぶない、止めてくださいーー！
「止めれるか！」

氷の柱のうちの一一本が、松本の頭上に思い切り落ちてこいつとして
いた。

俺が、更なる惨事になることを半ば覚悟しつつ、氷雨でその氷柱を吹つ飛ばそうとした時・・・

ひと、と俺の肩に、赤ん坊が手をついた。

「澪！」

俺が呼ぶと同時に・・・俺の放った氷が、瞬時に全て水になった。ただし、かなりの質量の水に。

「・・・ま、松本」

「水も滴るいい女・・・てどこですか？この真冬にーこの水の量！

！」

改めて言うが、俺は松本に切れこそすれ、切れられるような覚えは普段ない。

常に、100%、問題を起しそのはこの女であって、俺じゃない。しかし、この赤ん坊が出てきてから、何か調子が狂ってるだけなんだ。

「言い訳無用！」

そして俺は、本当に久しぶりに・・・隊長と副隊長の関係になつてからは初めて、松本に拳骨をくらつた。

* * * * *

らんらんらん。

松本は、能天気に鼻歌を歌いながら、温泉に入つてゐる。

結局温泉じゃねえか。

ここで俺が死体になつてあがつたら、松本の仕業に違いねえ。

あの戦いの後、全身ずぶぬれになつた松本を見かねて、昼に通された崖上の寺院に、一晩泊めてもらうことになつたのだ。

松本のワガママで、近くに湧いてる温泉の湯を汲んでもらって、やつと機嫌というわけだ。

「隊長、一緒に入りましょうよー」

「断る

「た～いちょ　」

「断る

「・・・これ以上ないがしろにしたら、素っ裸でダッシュしてそっち行きますよ」

「いたたまれねえから止める。何だよ？」

「聞きましたよー、児丹坊から。隊長の」と

「・・・何の話だ」

俺はばあちゃんの様子を見るついでに執務室から持つてきた、処理待の書類のひとつに目を通しながら言った。

とん、と捺印して、次をめくる。

俺の足元では、赤ん坊が座布団の上でスースー寝息を立ててる。

「50年前。隊長も、あの西関門で、ずっと振り分けを待つてて。

そして、やっぱり治安の悪い場所に一日決まって。

その時に、隊長のおばあちゃんがそれを見つけて、頼み込んで隊長を引き取つたんだって

「・・・昔の話だ」

とん、とまた印鑑を押した。

「だからこの子を、放つとけなかつたんですか？」

「死神なら、ソウル・ソサエティの理は護るべきだつていうんだろ

？」

俺は次の一枚に目を通しながら言つ。

「・・・生憎俺は、そこまで人間できてねえ。分かつただろ、今日の一件で！」

松本は、何も返事をしなかつた。

ただ、ご機嫌な鼻歌の続きを聞こえてきただけ。

赤ん坊が、それを聞きつけてか、ニコニコ笑い出す。

「おい、澪」

俺は印鑑を机において、見下ろした。そんなん聞いたり馬鹿がうつるだろ。

俺の心の声など露知らず、桜色に染まった頬でえくぼをつくり、もみじのような手を差し出してくる。

今度は俺のどの氷を溶かす気だか。

俺はその小さな手を握った。

fin.

第四話・ その小さな手を（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4009d/>

日番谷隊長の女難 1

2010年10月13日15時17分発行